

祭場に転換される住まい

—宮崎県椎葉村の神楽—

森 隆 男

はじめに

宮崎県椎葉村では20数か所の集落に神楽が伝承されており、毎年12月に「冬祭り」と称して奉納されてきた。しかし椎葉神楽の存在が知られるようになったのは、昭和39年に民俗芸能の研究者である本田安次が当地で聞き書きをしてからである。その後、昭和56年からの4年間で本格的な調査が実施されて、学術的な価値が明らかになった。

日本民家集落博物館に移築されている椎葉の民家で、平成18年に大河内神楽が演じられ、以後、利根川神楽や尾前神楽の公演がそれぞれの保存会のメンバーによって行われた。現在、地元では公民館等が会場に充てられているが、本来は民家（神楽宿）で行なわれた芸能である。

私の関心は、神楽の鑑賞はもちろんであるが、半世紀ぶりに民家が祭場になる公演で、日常生活の場が祭場に転換するときの動きを確認することにあった。盆や正月に来訪する祖先神や歳神、頭屋儀礼における氏神などを住まいに迎えて祀る事例は多いが、それらは日常生活を送る家族と来訪神が同居する形態である。それに対

し椎葉の神楽宿は、数日前に家族が住まいを明け渡し、住まい全体を神聖な祭場に転換する事例である。

椎葉家の概要と神楽当日のしつらえ

昭和34年（1959）に椎葉村高尾から移築された旧椎葉彦蔵家住宅は、江戸時代末期の建築といわれ、古態を残していることから国の重要文化財に指定されている。椎葉家はかつて神楽宿を交代でつとめた旧家であり、山の斜面を造成した奥行き狭い敷地に建てられていた。そのため図のように山村住居特有の並列型の間取りをもち、山側はすべて板壁になる。母屋の前の庭も狭い。コザは仏壇と床の間が設けられた客間で、コザノシタハラは隠居部屋として使用された。デイは主人夫婦の寝室であるが床の間がつくられ、神聖な部屋と意識されている。とくに下肥を扱った日や月経中の女性の立ち入りが禁止されていた。ウチネは家族が食事や団欒の時間を過ごす部屋である。ガイドコは調理場で、食材や食器の水を切るため一部が簀子になっている。

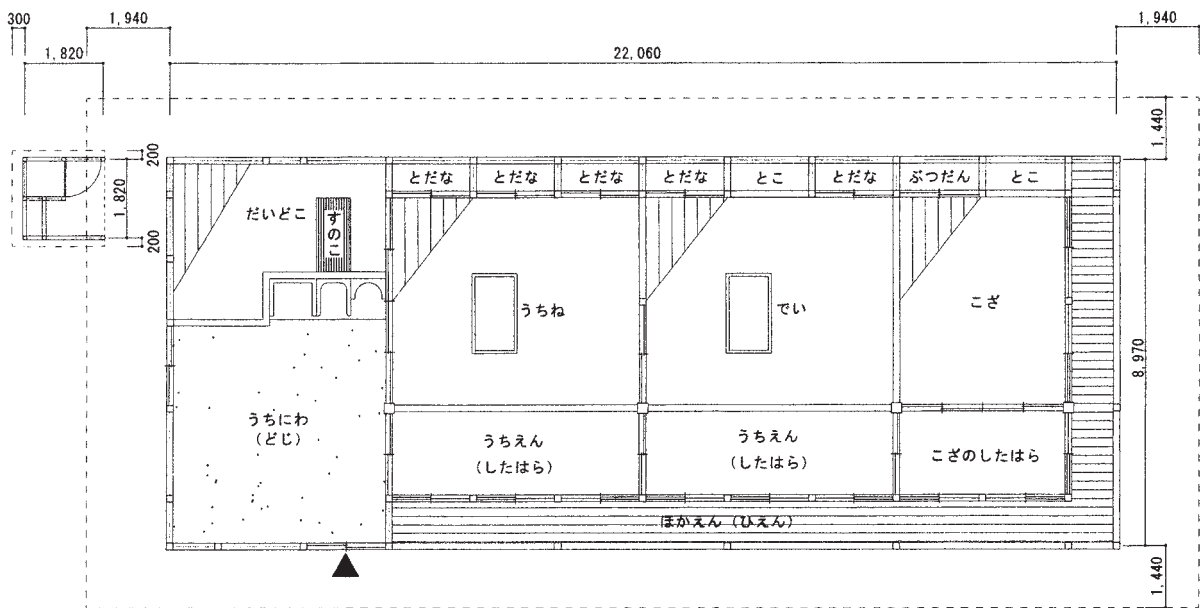


図 旧椎葉彦蔵家住宅 平面図（『民家の案内』日本民家集落博物館）



写真1 庭に立てられた依代（大河内神楽）

神楽の当日、舞台になるのがデイである。庭に神を招く大型の依代が立てられる。デイの床の間には「高天原」と呼ぶ祭壇が設けられ、その前にさまざまな供物が供えられる。デイの四隅にしめ縄が張りめぐらされ、「雲」と呼ぶ天蓋様のものがつりさげられる。この空間が神楽を舞う場となり、「御神屋」と呼ばれる。コザには囃子や神歌を歌う人が座るとともに、神職や舞手たちの控えの間になる。また村人はウチネと2つのウチエン、濡れ縁であるホカエンで見学する。デイ・ウチネとウチエンを仕切る敷居には建具を立てるための溝がなく、神楽を舞う場と観客を区別する結界の機能を果たす。溝がない敷居の存在は、椎葉家が数年に1度回ってくる神楽宿をつとめることを前提につくられていることを示している。

神楽の奉納と顕在化する秩序

椎葉神楽は出雲系の神楽で、いずれも御幣や鈴、刀などを手に取って舞う「採物舞」と、鬼などの面をつけて舞う「面の舞」が伝承されている。ここでは利根川神楽を中心に紹介する。

利根川神楽はかつて旧暦の11月17日の夕方から18日の朝にかけて舞われた夜神楽で、33演目が伝えられている。神楽宿は3戸が交代で受け持っていたが、昭和33年に氏神の境内に神楽殿を建築し、それ以来民家で行われることはなかった。

神楽に先立って、まず舞手たちが「神招きの



写真2 祭壇「高天原」（尾前神楽）



写真3 「雲」（大河内神楽）



写真4 「御神屋」（利根川神楽）

歌」で八百万の神を庭の依代に招き、さらにデイの祭壇に勧請して神酒を酌み交わす神事が行なわれる。その際に庭の依代から縁に立つ神職の手に綱が張られ、神々が綱を通して屋内に導かれる様子が演じられ、観客は神の来訪を視覚的に感じることになる。最初の演目は「有長」で、神降ろしの曲である。以下鬼面をつけた「鬼神」などが次々に奉納される。舞手の激しい動きは、神の感情を表現しているといわれる。「雲」が

激しく揺り動かされるのも同様である。神歌が唄われるのも椎葉神楽の特色である。終わりのころに演じられる「火の神」では、ダイドコの竈の前で経を唱えた後、火の神と神酒を酌み交わす。椎葉の神楽は本来夜通し行なわれるので、村人たちは銘々ご馳走を持ち寄り、食べながら見物したという。

椎葉の民家では、日常的にはドジ（土間）から出入りし、客はデイやコザに招き入れられる。



写真5 舞手と観客（尾前神楽）



写真6 舞手の激しい動き（尾前神楽）

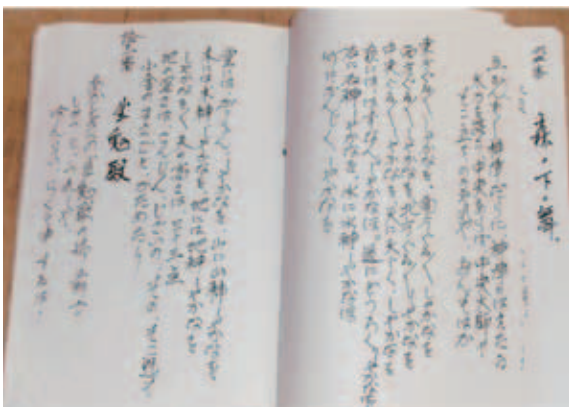


写真7 神歌（尾前神楽）

ウチネ、デイ、コザの順に部屋の序列が高くなり、客の階層や対応内容によって使い分けられる。一般的には通路の機能をもつウチエンが、当家では建具によって遮断されている。ウチエンの主たる機能が各部屋と屋外の緩衝にあるといえる。

神楽の当日、デイが最も高い格式の部屋となり、神々の動線は、庭→ホカエン→ウチエン→デイ→床の間になる。神楽は床の間の祭壇を正面にして演じられるので、舞手はウチエンやホカエンの観客に対して背を向けることになる。神楽を奉納する対象はあくまでも神なのである。そして床の間とデイが神の空間、ウチエンとホカエンが人の空間に区別されることになる。この日、神の来訪によって、ホカエンをクチとし、デイの床の間をオクとする古い秩序が顕在化する。

神と人の交流さらに再生の場の出現へ

尾前神楽では神饌としてイノシシの頭部が供えられる。演目「板起こし」は狩猟神事であり、この地域の生業の一つが狩猟であったことを伝えている。これについては、柳田國男が『後狩詞記』で当地の狩猟伝承を紹介している。神楽の合間に、山刀を使って猪の頭部から肉を切り取る儀礼が行なわれる。この肉は竹串に挿してたいまつで炙り、参加者に振舞われる。またすべての神楽で、舞手たちが観客席に入ってきて酒をすすめる。これらは神と人の共食として理解することができよう。

また演目の間に、神職が観客の間を回って頬に墨をつける所作をする。これは神が祝福した印であるとともに魔よけの意味をもつ呪術で、



写真8 猪の頭部から肉を切り取る（尾前神楽）



写真9 神の祝福の印（尾前神楽）

全国的にみられる習俗である。大河内神楽で獅子頭が観客の頭をかぶる所作をして回るのも同様の意味がある。

奥三河地方で行われる花祭りでは、神である鬼が炉の火をかき乱し、しめ縄を切ることで結界が破られる。そのあとは神と人が入り乱れて乱舞が展開される。椎葉神楽でも結界を切る儀礼が行なわれた可能性がある。神楽の祭場では、結界を切って人と神が時間と空間を共有することが重要であったといえる。それは人の世界に、神のもつ活力がもたらされることを意味した。

さて尾前神楽ではクライマックスを迎えるころ、祭壇の前で2人の舞手が弦を外した2本の弓を合わせて仮の門をつくる。これは女性器を模したもので、観客が次々にここを潜る。早川孝太郎は文献や伝承をもとにかつて花祭りにおいて「白山」と呼ばれる再生の場がつくられ、老人や病人がここを潜ることにより健康な体を取り戻す儀礼が行なわれたことを明らかにした。尾前神楽で行われる所作にも同様の観念が存在しており、すでに花祭りで失われた神楽の



写真10 女性器を模した仮の門を潜る（尾前神楽）

重要な役割が今なお伝承されていることに驚かざるを得ない。

ちなみに「白山」とは、早川によると2間ないし2間半、高さ3間ないし3間半の屋根のない方形の建物である。四方の壁はすべて青柴を束ねて葺き囲い、各々の壁に出入り口が開けてあった。また内部は約2尺の高さの床がつくられ、その下にも青柴の束が敷き並べられていたという。さらに天井に相当する部分に梵天を飾り、そこから四方に青・赤・黄・黒・白の5色の布を張り渡していた。このような白山の内部は、黄泉の世界に想定されていたと指摘している。

祭壇を設け神楽を舞うデイは多くの神々が集い、神々のエネルギーに満ちた空間と意識されている。再生への期待も、このような意識の延長線上に位置づけることができよう。2本の弓がつくる仮の門は、それを実感するための装置である。

文化遺産としての民家と神楽

椎葉神楽では、集落内の住まいの一つを祭場にして、そこに多くの神々を迎えて人と神が交流する空間を創出している。さらに儀礼の中で再生の装置を用意して病や災いを取り除く呪術も行われる。ここでは人と神が交流を通して地域が活力を取り戻していくストーリーが演劇的に展開されることになる。当屋になった住まい全体が祭場に転換される椎葉神楽は、村人にとって貴重な時間と空間を創出する機会であった。

平成3年、各集落に伝承されてきた神楽が「椎葉神楽」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定された。日本民家集落博物館の移築民家で行なわれた公演は、無形文化遺産の椎葉神楽が有形文化遺産の椎葉の民家と半世紀ぶりに出会い、本来の姿を取り戻した瞬間でもあった。

（参考文献）

早川孝太郎全集第2巻 未来社 1972

博物館運営委員 文学部教授